ヌ 伯廿六〇六、卅四〇廿二
但二〇廿二 來四〇十三

ル 伯十〇八、九 傳十一〇五

チ 詩四十〇五

ワ 箴十一〇四

カ 詩百十九〇百十五
ヨ 箴十五

タ 代下十九〇二 詩百十九〇、百五十八

レ 伯卅一〇六 詩廿六〇二

ゾ 詩五〇八、百四十三〇十

イ 詩百四十〇四

います　九 我わけぼのゝ翼をかりて海のはてにすむとも　十 かしこにて尙なんぢの手われをみちびき汝のみぎの手われをたもちたまはん　十一 暗いかならず我をおほひ我をかこめる光い夜とならんと我いふとも　十二 汝のみまへにい暗ものをかくすことおく夜もひるのごとくに輝けり。おんぢにいくらきも光もことおることとなし　十三 汝いわゞはらわたをつくり又わがはゝの胎にわれを組成たまひたり　十四 われおんぢお感謝す。われい畏るべく奇しくつくられたり。おんぢの事跡いおとゞくゞくすし。わが靈魂いいとつばらに之をおれり　十五 われ隱れたるところにてつくられ地の底所にて妙ホつゞりあむされしときわが骨おんぢにかくるゝおとおかりき　十六 わが體いまだ全からざるホおんぢの目いはやくより之をみ日々かたちづくられしわが百體の一だにあらざりし時にことゞくおんぢの冊に之るされたり　十七 神よおんぢのもろ〳〵の思念いわれに貴きこといかばかりぞや。そのみおもひの總計いいかに多きかな　十八 我これを算へんとすれどもそのかずい沙よりもホ多し。われ眠さむるときも尙なんぢとともにをる　十九 神よおんぢいかならず惡者をころしたまはん。されど血をおがすものよ我をはおれされ　二十 かれらいあしき企圖をもて汝にさからひて言ふ。おんぢの仇いみだりに聖名をとなふるおり　二一 ヱホバよわきい汝をにくむ者をにくむにあらずや。なんぢホ逆ひておこりたつものを厭ふにあらずや　二二 われ甚くかきらをにくみてわが仇とす　二三 神よねがたくい我をさぐりてわが心を之り我をこゝろみてわがもろ〳〵の思念を之りたまへ　二四 ねがたくい我ホよてしまなる途のありやなしやを見てわれを永遠のみちホ導きたまへ

第百四十篇　伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 ヱホバよねがはくい惡人よりわれを助けいだし我をまもりて强暴人よりのがれしめたまへ　二 かれらい

ロ 詩五十六〇六
ハ 詩五十八〇四 羅三〇十三

ニ 詩七十一〇四
ホ 詩百四十〇一

ヘ 詩廿五〇七、五十七〇六、百十九〇百十、百四十一〇九 耶十八〇廿二

ト 申卅二〇廿七
ナ 詩七〇十六、九十四〇廿三 羅十二〇十三、十八〇七

ヽ 詩十一〇六

メ 王上八〇四十五 詩九〇四

イ 詩七十〇五

ロ 默八〇三
ハ 默五〇八、八〇三、四

ニ 出廿九〇廿九 提前二〇八

ホ 詩百卅四〇二 提前二〇八

ヘ 羅廿三〇六
ト 羅九〇八、十九〇廿五、廿七 五〇十二 加六〇一

心のうちに殘忍をくただてたえず戰鬪をおこす　三 かれらい蛇のごとくおのが舌を利す。そのくちびるのうちに蝮の毒あり。セラ　四 ヱホバよ願くい惡人を保ちてあしきひとの手よりのがれしめ我をまもりてわが足をつまづかせんと謀おあらぶる人よりのがれしめ給へ　五 高ぶるものいわがためにゐと索とをふせ路のほとりお網をはりかつ機をまうけたり。セラ　六 われヱホバにいへらく汝いわが神おり。ヱホバよねがはくいわが祈のこゑをきゝたまへ　七 わが救のちからなる主の神よ。なんぢいたゝかひの日にわが首をおほひたまへり　八 ヱホバよあしきひとの欲ひのまゝホすることをゆるしたまふなかれ。そのあしき企圖をとげしめたまふなかを。おそらくい彼等みづから誇らん。セラ　九 われを圍むものゝ首いおのれのくちびるれ殘害におほはるべし　十 もえたる炭いかきらのうへにおち。かれらい火ホなげいれられ。ふかき穴ホなげいれられて再びおきいづることあたはざるべし　十一 惡言をいふものい世にたてらきず暴ぶるものいわざはひに追及をてたふさるべし　十二 われい苦しむものゝ訴とまづしきものゝ義とをヱホバの守りたまふを知る　十三 義者いかならず聖名おかんしやし直者いみまへに住ん

第百四十一篇　ダビデのうた

一 ヱホバよ我なんぢを呼ふ。ねがたくい速かホわれホおきたりたまへ。われ汝をよばふときわが聲ホ耳をかたぶけたまへ　二 われい薰物のごとくにわが祈をみまへホおきゝげ夕のうなへものゝ如くホわが手をあげて聖前におきゝげんことをねがふ　三 ヱホバよねがたくいわが口ホ門守をおきてわがくちびるの戶をまもりたまへ　四 惡事ホわがこゝろを傾かしめて邪曲をおこなふ者とゝもに惡きわざホあづからしめ給ふなかれ。又かれらの珍饈をくらはしめたまふなかれ　五 義者われをうつとも我いこれを愛しみとし。そのわれをせむ

ナ 哥後一〇九
哥後廿〇十二 詩廿五〇十五、百廿三〇一、二
ヌ 詩百十九〇百十、百四十〇、五、百四十二〇三
ル 詩廿五〇八
イ 箴廿六〇十六
ロ 詩百四十三〇四
ハ 詩百四十〇五
ニ 詩ゞ十九〇廿
ホ 詩卅一〇十二、八十九〇八十八
ヘ 詩四十六〇一、九十一〇二
ト 詩廿七〇十三
チ 詩十六〇五、七十三〇廿六、百十九〇五十七 箴三〇廿四
リ 詩百十六〇六
ヌ 詩十三〇六、百十九〇十七
ル 詩卅四〇二
イ 詩卅一〇一

るを頭のわぶらとせん、わゞの頭にこれを辭まず、かれらゞの禍害わあふときもわが祈いたえじ　六 ろの審士いはほの崖わなげられん、かれらわがことゞばの甘美わよりて聽ことをすべし　七 人つちを耕しらがつゞごとく我儕のほねいはかの口わちらさる　八 されど主ヱホバよわゞの目いなは汝わむかふ、我なんぢわ依賴めり、ねゞはくいわが靈魂をともしきまゝわ捨おきたまふなかれ　九 我をまもりてかきらがわがためわまうくる羂とよこしまを行ふものゝ機とをまぬかをしめたまへ　十 わをい全くのがきん、わしきものをおのをの網におちいらしめたまへ

第百四十二篇　ダビデが洞わありしときよみたる教へのうたなり祈なり

一 わを聲をいだしてヱホバわよゞゝより聲をいだしてヱホバわこひもとむ　二 わをいろの聖前わわが歎息をろゝぎいだし、其みまへわわが患難をあらはす　三 我靈魂わがうちにきえゝせんとするときも汝わがみちを識たまへり、人わををとらへんとてわがゆくみちわ羂をかくせり　四 願くいわがみぎの手に目をろゝぎて見たまへ一人だわ我を忘るものなし、わをわい遁所なくまたわが靈魂をかへりみる人なし　五 ヱホバよわを汝をよゞふ我いへらく汝いわがさけどころ有生の地わてわがうべき分なりと　六 ねゞはくいわが號呼わみてゝろをとめたまへ、わをいたく卑くせらをたをゞなり、我をせむる者より助けいだしたまへ、彼等いわをにまさりて強けきゞなり　七 願くいわゞたましひを囹圄よりいだしわれに聖名を感謝せしめたまへ、なんぢ豊かわゝれを待ひたまふべけをゞ義者ゝれをめぐらん

第百四十三篇　ダビデのうた

一 ヱホバよねゞはくいわが祈をきゝわが懇求わみゝをかたぶけたまへ、なんぢの眞實なんぢの公義をも

て我わこたへたまへ　二 汝の忘もべの審判わかゝつらひたまふなかれ、ろいいけるもの一人だにみまへに義とせらるゝいなし　三 仇いわゞたましひを追めわが生命を地にうちすて死てひさしく世を經たるものゝごとく我をくらき所わすまはせたり　四 又わがたましひいわゞ衷わきえうせんとし、わが心いわゞうちわ曠さびれたり　五 われいいわしへの日をおもひいで汝のおこなひたまひし一切のことを考へなんぢの手のみわざをおもふ　六 われ汝わむかひてわが手をのべわゞたましひい燥きおとろへたる地のおとく汝を忘たへり、セラ　七 ヱホバよ速かにわれにこたへたまへわが靈魂いおとろふ、われに聖顏をかくしたまふなかれ、おろらくいわれ穴わくだるものゝごとくならん　八 朝わなんぢの仁慈をきかしめたまへ、われ汝わよりたのめゞなり、わゞの歩むべき途ををらせたまへ、われわが靈魂をなんぢに舉れゞをり　九 ヱホバよねゞはくいわれをわが仇よりたすけ出したまへ、われ匿れんとして汝にゞしりゆく　十 汝いわゞの神なり、われに聖旨をおこなふことを汝をしへたまへ、惠ふかき聖靈をもて我をたひらかなる國わみちびきたまへ　十一 ヱホバよねがはくい聖名のためわ我をいかし、なんぢの義わよりてわゞたましひを患難よりいだしたまへ　十二 又なんぢの仁慈によりてわが仇をたち靈魂をくるしむる者汝ことゞく滅したまへ、ろい我なんぢの僕なり

第百四十四篇　ダビデのうた

一 戰することをわが手わをしへ鬪ふことをわが指にをしへたまふ、わが磐ヱホバいほむべきかな　二 ヱホバいわが仁慈わゞの城なり、わゞたかき櫓われをすくひたまふ者なり、わが盾わゞの依賴むものなり、ヱホバいわが民をわれわまたゞのゞせたまふ　三 ヱホバよ人いいかなる者おれゞ之を忘り人の子いいかなる者なれゞ之をみこゝろに記たまふや　四 人い氣息にことならず、ろの存らふる日いすきゆく影わひとし　五 ヱホバ

よねぶはくいなんぢの天をたれてくだり手を山につけて煙をたゝしめたまへ　電光をうちいだして彼等をちらし、なんぢの矢をさなちてかれらを敗りたまへ　上より手をのべ我をすくひて大水より外人の手よりたすけいだしたまへ　かれらの口いむなしき言をいひ、うの右の手いいつはりのみぎの手なり　神よわれ汝ゐむかひて新らしき歌をうたひ十絃の琴にあはせて汝をほめうたん　なんぢい王たちに救をあたへ僕ダビデをわざはひの劍よりすくひたまふ神なり　ねがはくい我をすくひて外人の手よりたすけいだしたまへ、かれらの口いむなしき言をいひうの右の手いいつはりのみぎの手なり　われらの男子いとしわかきとき育ちたる草木のごとく、われらの女子い宮のふりゐならひて刻みいだし隅の石のごとくあらん　われらの倉いみちたらひてさまゝのものをうおへ、われらの羊い野にて千万の子をうみわれらの牡牛いよく物をおひ、われらの獨ゐいせめいることなく亦かしいづることなく叫ぶこともなからん　かゝる狀の民いさいはひなり、ヱホバをおのぶの神とする民いさいはひあり

第百四十五篇　ダビデの讃美のうた

一　わぞかみ王よわれ汝をあぞめ世々かぎりなく聖名をほめまつらん　二　われ日ごとに汝をほめ世々かぎりなく聖名をほめたゝへん　三　ヱバホい大にましませば最もほむべきかな、うの大おることい尋ねきることかたし　四　この代いかの代にむかひておんぢの事跡をほめたゝへ、なんぢの大能のはたらきを宣つたへん　五　われ汝のほまれの榮光ある稜威となんぢのくすしきみわざとを深くおもはん　六　人いなんぢのおろるべき動作のいきほひをかたり我いおんぢの大おることを宣つたへん　七　かれらいおんぢの大おる惠の跡をいひいで、なんぢの義をほめうたん　八　ヱホバい惠ふかく憐情みちまた怒たまふことおうく憐憫おほい

なり　九　ヱホバいよろづの者にめぐみあり、うのふかき憐憫いみわざの上にあまねし　十　ヱホバよ汝のすべての事跡いなんぢに感謝し、なんぢの聖徒いなんぢをほめん　十一　かをらい御國のえいくわうをかたり汝のみちからを宣つたへて　十二　うの大能のはたらきとうのみくにの榮光あるみいづとを人の子輩に云らすべし　十三　おんぢの國いとこしへの國なり、おんぢの政治いよろづ代にたゆることなし　十四　ヱホバいすべて倒んとする者をさゝへ、かゞむものを直くたゝしめたまふ　十五　よろづのものゝ目いなんぢを待おんぢい時に云たがひてかれらに糧をあたへたまふ　十六　なんぢ手をひらきてもろ〳〵の生るものゝ願望をあかしめたまふ　十七　ヱホバいうのすべての途にたゞしく、うのすべての作爲にめぐみふかし　十八　すべてヱホバをよぶもの誠をもて之をよぶものにヱホバい近くましますあり　十九　ヱホバい己をおうるゝものゝ願望をみちたらしめ、うの號呼をきゝて之をすくひたまふ　二十　ヱホバいおのれを愛しむものをすべて守りたまへど惡者をことゞく滅したまはん　二一　わが口いヱホバの頌美をかたり、よろづの民い世々かぎりなくうのきよき名をほめまつるべし

第百四十六篇

一　ヱホバを讃稱へよ、わがたましひよヱホバをほめたゝへよ　二　われ生るかぎりいヱホバをほめたゝへ、わがおがらふるほどいわが神をほめうたん　三　もろ〳〵の君によりたのむことなく人の子によりたのむおかれ、かをらに助あることなし　四　うの息いでゆけばかれ土にかへる、うの日かをがもろ〳〵の企圖いほろびん　五　ヤコブの神をおのが助とし、うの望をおのぶの神ヱホバにおくものい福ひあり　六　此いあめつちと海とうのおかなるあらゆるものを造り、とこしへゐ眞實をまもり　七　虐げらるゝものゝためゐ審判をおこ

イ 詩百三〇一
ロ 詩百四〇一、卅三
ハ 詩百十八〇八、九　繫二〇廿二
ニ 詩百四〇廿九　傳十二〇七
ホ 撒前二〇六
ヘ 詩百四十四〇十五　耶十七〇七
ト 創一〇一　詩十四〇七
チ 詩百七〇九
ト 詩百四十六〇十　提前一〇十七
チ 詩百四十六〇八
リ 詩百六十四〇廿七
ヌ 詩百卅六〇廿五
ル 詩百四〇廿一、百四十七〇九
ヲ 申四〇七
ワ 約四〇廿二
カ 詩卅一〇廿三、九十七〇十
ホ 詩百〇五　約一〇七
ヘ 詩十九〇二
イ 詩九十六〇四、百四十七〇五
ロ 伯五〇九、九〇十　羅十一〇卅三
ハ 繫卅八〇十九
タ 詩百廿八〇三
レ 申卅三〇廿九　詩卅三〇十二、六十五〇四、百四十六〇五
ヨ 詩百四十四〇七、八
ワ 詩卅三〇二、三四十〇三
カ 詩十八〇五十
ニ 出卅四〇六、七　民十四〇十八　詩八十六、五、十五、百三〇八

リ 詩百七〇九　ヌ 詩六十八〇六、百七〇十、十四　ル 太九〇世、約九〇七世世二　ヲ 詩百四十五〇十四、百四十七〇六、路十三〇十三　ワ 申十〇十八、詩六十八〇五　カ 詩百四十七〇六　ヨ 出十五〇十八、詩十〇十八、百四十五〇十三、默十一〇十五

イ 詩九十二〇一　ロ 詩百世五〇三　ハ 詩世三〇一　ニ 詩百二〇十六　ホ 申世〇三　ヘ 詩五十一〇十七、饗五十七〇十五、六十一〇一、路四〇十八　ト 創十五〇五、饗四十〇世六　チ 代上十六〇世五、詩四十八〇一、九十六〇四、百四十五〇三　リ 創一〇三　ヌ 申四十〇十八　ル 詩百四十六〇八、九　ヲ 伯世八〇世六、世七、饗百四〇十三、十四　ワ 伯世八〇四十一、詩百四〇世七、世八、百世六〇世五、百四十五〇十五　カ 伯世八〇四十一、太六〇世六　ヨ 詩世三〇十六至十八、何一〇七　タ 饗六十〇十七、十八　レ 詩百世二〇十五　ソ 伯世七〇十二、詩百七〇世七、六　ツ 伯世七〇六

あひ餓たるものに食物をあたへたまふ神あり。ヱホバいとらされたる人をときはあちたまふ。ヱホバいめしひの目をひらきヱホバい屈者をなほくたゝせヱホバい義きものを愛くしみたまふ。ヱホバい他邦人をまもり孤子と寡婦とをさゝへたまふ。されど悪きものゝ徑いくつがへしたまふなり。ヱホバいとこしへに統御たまふ。シオンよなんぢの神いよろづ代まで統御たまふ。ヱホバをほめたゝへよ

第百四十七篇

一 ヱホバをほめたゝへよ。われらの神をほめうたふい善ことあり樂しきことなり稱まつるいよろしきに適へり。二 ヱホバいエルサレムをきづきイスラエルのさすらへる者をあつめたまふ。三 ヱホバい心のくだけたるものを醫し、うの傷をつゝみたまふ。四 ヱホバいもろ〳〵の星の數をかゞへてすべてこれに名をあたへたまふ。五 わがらの主いおほいなり、うの能力もまた大なり。うの智慧いきはまりなし。六 ヱホバい柔和なるものをさゝへ悪きものを地にひきおとしたまふ。七 ヱホバに感謝してうたへ琴にあはせてわがらの神をほめうたへ。八 ヱホバい雲をもて天をおほひ地のために雨をうるへもろ〳〵の山に草をはえしめ。九 くひものを獸にあたへ並なく小鴉にあたへたまふ。十 ヱホバい馬のちからを喜びたまはず人の足をよみしたまはず。十一 ヱホバいおのをを畏るゝものとおのをの憐憫をのゞむものとを好したまふ。十二 エルサレムよヱホバをほめたゝへよ、シオンよなんぢの神をほめたゝへよ。十三 ヱホバいなんぢの門の關木をかたうし汝のうちなる子輩をさきはひたまひたをぺなり。十四 ヱホバい汝のすべての境にやすらぎをあたへいと嘉麥をもて汝をあかしめたまふ。十五 ヱホバいうのいましめを地にくだしたまふ。うの聖言いいとすみやかゐむしる。十六 ヱホバい雪をひつじの毛のごとくふらせ霜を灰のごとくにまきたまふ。十七 ヱホバい氷をつちくれのごとくに擲

イ 詩百三〇世、世一　ロ 王上八〇世七、哥後十二〇二　ハ 創一〇七　ニ 創一〇一、六、七、詩世三〇六、九　ホ 詩八十九〇世七、百十九〇九十九、十一、耶世一〇世五世六、世三〇世五　ヘ 饗四十三〇世　ト 詩百四十七〇十五至十八　チ 饗四十四〇世三、四十九〇十三、五十五〇十二　リ 詩八〇一、饗十二〇四　ヌ 詩百十三〇四　ル 詩七十五〇十　ヲ 詩百四十九〇九　ワ 申二〇十七

ナ 詩百四十七〇十五、伯世七〇十　ナ 申世三〇二、詩四、詩七十六〇一七十八〇五、百三〇七　ラ 馬四〇四　ム 申四〇世二、詩世四、耶三〇一、二

ちたまふ。たをかろの寒冷ふたふることをえんや。十八 ヱホバ聖言をくだしてこれを消しうの風をふかしめたまへぺもろ〳〵の水いなげる。十九 ヱホバいうのみことばをヤコブに示しうのもろ〳〵の律法とろの審判とをイスラエルに志めしたまふ。二十 ヱホバいいづをの國をも如此あしらひたまひしにあらず。ヱホバのもろもろの審判をかれらい志らざるなり。ヱホバをほめたゝへよ

第百四十八篇

一 ヱホバをほめたゝへよ、もろ〳〵の天よりヱホバをほめたゝへよ。もろ〳〵の高所にてヱホバをほめたへよ。二 うの天使よこなヱホバをほめたゝへよ。うの萬軍よみなヱホバをほめたゝへよ。三 日よ月よヱホバをほめたゝへよ、ひかりの星よみなヱホバをほめたゝへよ。四 もろ〳〵の天のてんよ天のうへなる水よヱホバをほめたゝへよ。五 てきらいみなヱホバの聖名をほめたゝふべし。ういヱホバ命じたまひたれば かれらい造られたり。六 ヱホバまた此等をいやとほなのに立たまひたり又すぎうすまじき詔命をくだしたまへり。七 龍よ、すべての淵よ、地よりヱホバをほめたゝへよ。八 火よ、靄よ、雪よ、霧よ、みことばにたゞふ狂風よ。九 もろ〳〵の山、もろ〳〵のをか、實をむすぶ樹すべての香柏よ。十 獸もろ〳〵の牲畜、はふもの、翼ある鳥よ。十一 地の王たち、もろ〳〵のたみ、地の諸侯よ、地のもろ〳〵の審士よ。十二 少きをのこ、若きをみな、老たる人、をさなきものよ。十三 みなヱホバの聖名をほめたゝふべし。うの聖名いたかくして類おくうのえいくわうい地よりも天よりもうへにあれぺおり。十四 ヱホバいうの民のために一つの角をあげたまへり、こいうのもろ〳〵の聖徒のほまをヱホバにちかき民おるイスラエルの子輩のほまをおりヱホバを讚稱へよ

第百四十九篇

イ 詩百四十五〇五、六
ロ 申三〇廿四
ハ 詩八十一〇二、百四十九〇
ニ 出十五〇廿
ホ 詩廿三〇二、九十二〇三、百四十四〇九
ヘ 代上十五〇十六、十九、廿八、十六〇五、廿五〇一、六

一 エホバをほめたゝへよエホバに對ひてあたらしき歌をうたへ聖徒のつどひにてエホバの頌美をうたへ
二 イスラエルいおのをを造りたまひしものをよろこひシオンの子輩い己が王のゆゑによりて樂しむべし
三 かまらをどりつゝうの聖名をほめたゝへ琴鼓にてエホバをほめうたふべし 四 エホバいおのが民をよろこび救にて柔和あるものを美しく装たまへあり 五 聖徒いえいくわうの故によりてよろこび、うの寢牀にてよろこびうたふべし 六 うの口に神をほむるうたあり、うの手にもろはの劍あり 七 こいもろ〳〵の國に仇をかへし、もろ〳〵の民をつみあひ 八 かまらの王たちを鏈にて、かまらの貴人をくろかねの械にていましめ 九 錄したる審判をかまらに行ふべきためあり、斯るほまをいうのもろ〳〵の聖徒にあり エホバをほめたゝへよ

第百五十篇

一 エホバをほめたゝへようの聖所にて神をほめたゝへよ、うの能力のあらはるゝ穹蒼にて神をほめたゝへよ 二 うの大能のはたらきのゆゑをもて神をほめたゝへよ、うの秀てふほいおることの故によりてエホバをほめたゝへよ 三 ラッパの聲をもて神をほめたゝへよ琴と琴とをもて神をほめたゝへよ 四 つゝみと蹈舞とをもて神をほめたゝへよ絃簫をもて神をほめたゝへよ 五 音のたかき鐃鈸をもて神をほめたゝへよ、ありひゝく鐃鈸をもて神をほめたゝへよ 六 氣息あるものい皆ヤハをほめたゝふべし。おんぢらエホバをほめたゝへよ

詩篇　終

箴言

第一章

一 ダビデの子イスラエルの王ソロモンの箴言 二 こい人に智慧と訓誨とを知らしめ哲言を曉らせ
三 さとき訓と公義と公平と正直とをえしめ 四 拙者にさとりを與へ少者わ知識と謹慎とを得させん爲おり
五 知慧ある者い之を聞て學にすゝみ、哲者い智裏をうべし 六 人これによりて箴言と譬喩と智慧ある者の
言とうの隱語とを悟らん○ 七 エホバを畏るゝい知識の本おり、愚おる者い智慧と訓誨とを輕んず 八 我が
子よ汝の父の教をきけ、汝の母の法を棄るとおかれ 九 これ汝の首の美しき冠となり汝の項の妝飾とならん○ 十 わが子よ惡者おんぢを誘ふとも從ふことなかれ 十一 彼等おんぢにむかひて、請ふわれらと偕にきたれ我儕まちぶせして人の血を流し無辜ものを故なきに伏てねらひ 十二 陰府のごとく彼等を活たるまゝにて
呑み、壯健なる者を墳に下る者のごとくになさん 十三 われら各樣のたふとき財寶をえ、奪ひ取たる物をもて
我儕の家に盈さん 十四 汝われらと偕に籤をひけ我儕とともに一の金囊を持べしと云とも 十五 我が子よ彼等と
ともに途を歩むことおかれ、汝の足を禁めてうの路わゆくこと勿れ 十六 うい彼らの足い惡に趨り血を流さ
んとて急げをおり 十七 (すべて鳥の眼の前にて羅を張い徒勞なり) 十八 彼等とおのれの血のために埋伏し、お
のれの命をふしてねらふ 十九 凡て利を貪る者の途いかくの如し、是うの持主をして生命をうしなと去むる
なり○ 二十 智慧外に呼とり衢に其聲をあげ 二一 鬱鬧しき所にさけび城市の門の口邑の中にうの言をのべてい
ふ 二二 なんぢら拙者のつたなきを愛し、嘲笑者のあざけりを樂み、愚なる者の知識を惡むい幾時までかや
二三 わが督斥に去たゞひて心を改めよ、視よわれ我が靈を汝らにろゝぎ我が言をおんぢらに示さん○ 二四 わ
れ呼たれども汝らこたへず、手を伸たれども顧る者おく 二五 かへつて我がすべての勸告をすて、我が督斥を

イ 王上四〇廿二、篇十〇一、廿五〇一、傳十二〇九
ロ 篇二〇二、九
ハ 篇九〇四
ニ 篇九〇九
ホ 詩七十八〇二
ヘ 伯廿八〇廿八、詩百十一〇十、篇九〇十、傳十二〇十
ト 篇四〇二、六〇廿
チ 篇三〇廿二
リ 耶二〇廿六
ヌ 詩廿八〇一、百四十三〇七
ル 詩一〇一、篇四〇十四
ヲ 詩百十九〇百一、箴五十九〇七、篇三〇十五
カ 篇十五〇廿七、提前六〇十
ヨ 篇八〇一、九〇三、約七〇廿七
タ 耶二〇廿八
レ 箴六十五、十六、六十六〇
ソ 詩百七〇十一、篇一〇廿

受ざりしに由り　二六　われ汝らが禍災にあふとき之を笑ひ、汝らの恐懼きたらんとき嘲るべし　二七　これい汝らのおろれ飈風の如くきたり、汝らのはろび飄風の如くきたり、難難とかなしみと汝らにきたらん時なり　二八　ろのとき彼等われを呼むん、然れどわれ應へじ、只管に我を求めん、されど我に遇じ　二九　かれら知識を憎みヱホバを畏るゝことを悅むず　三十　わが勸ゐ從はず凡て我督斥をいやしめたるによりて　三一　己の途の果を食ひおのれの策略に飽べし　三二　拙者の違逆いおのれを殺し、愚なる者の幸福いおのれを滅さん　三三　されど我に聞ものい平穩に住ひかつ禍害にあふ恐怖なくして安然ならん

第三章

一　我が子よ汝もし我が言をうけ我が誡命を汝のこゝろに藏め　二　斯て汝の耳を智慧ゐ傾け汝の心をさとりゐむけ　三　もし知識を呼求め聰明をえんと汝の聲をあげ　四　銀の如くこれを探り、秘れたる寶の如くこれを尋べ　五　汝ヱホバを畏るゝことを曉り神を知ることを得べし　六　ろのヱホバい智慧をあたへ、知識と聰明とろの口より出れべなり　七　かれい義人のために聰明をたくはへ直く行む者の盾となる　八　ろい公平の途をたもちろの聖徒の途すおを守りたまへべなり　九　斯て汝いつひに公義と公平と正直と一切の善道を曉らん　十　すなむち智慧なんぢの心にいり知識なんぢの靈魂に樂しからん　十一　謹慎おんぢを守り聰明なんぢを保たん　十二　惡き途よりすくひ虛僞をかたる者より救むん　十三　彼等い直き途をはおれて幽暗き路に行き　十四　惡を行ふを樂み、惡者のいつさりを悅び　十五　ろの途いまごりろの行爲い邪曲なり　十六　聰明いやた汝を妓女より救ひ言をもて諂ふ婦より救むん　十七　彼いわかき時の偶をすて、ろの神に契約せしことを忘るゝなり　十八　ろの家い死に下り、ろの途い陰府に趣く　十九　凡てかれにゆく者い歸らず、また生命の途に達らざるゐり　二十　聰明汝をたもちてよき途に行ませ義人の途を守らしめん　二一　ろい義人い地におがらへをり、完全者い地ゐ止ら

ツ 詩二〇四 子 箴十〇廿四
ナ 伯廿七〇九、卅五〇十二 箴一〇十五 耶十一〇十一、十四〇十二 結八〇十八 米三〇四 亞七〇十三
ラ 詩百十一〇十四 箴一〇廿二 詩百十九〇百七十三
ウ 詩八十一〇十一 箴一〇廿五
ム 伯四〇八 箴十四〇十四、廿二〇八 箴三〇十一 耶六〇十九
ノ 詩廿五〇十二、十三
オ 詩百十二〇七
イ 箴四〇廿一、七〇一
ロ 箴三〇十四 太十三〇四十四
ハ 王上三〇九、十二 雜一〇五
ニ 詩八十四〇十一 箴卅〇五
ホ 傳上三〇九 詩六十六〇九
ヘ 箴六〇廿二
ト 創三〇十九、廿
チ 箴十〇廿三 耶十一〇十五
リ 羅十〇卅二 詩百廿五〇五
ヌ 詩百廿五〇廿二
ル 箴五〇廿 箴五〇三、六〇廿四、七〇
ヲ 箴五〇廿四、十五
ワ 馬二〇十四、十五
カ 箴七〇廿七
ヨ 詩卅七〇廿九

タ 伯十八〇十七 詩卅七〇廿八百四〇卅五
イ 申八〇一 卅〇十六、廿
ロ 詩百十九〇百六十五
ハ 出十三〇九 申六〇八 箴六〇廿一、七〇三
ニ 耶十七〇一 哥撒三〇三
ホ 詩百十一〇十
ヘ 詩七〇三、五
ト 耶九〇廿三
チ 代上廿八〇九
リ 耶十〇廿三
ヌ 羅十二〇十六 箴十六〇六
ル 伯一〇一 箴十六〇六
ヲ 伯一一〇廿四
ワ 出廿二〇廿九、廿三〇十九、卅四〇廿六 申廿六〇二 馬三〇十 路十四〇十三
カ 申廿八〇八 詩九十四〇十
ヨ 伯五〇十七 詩九十七〇十二 來十二〇五、六 歷三〇十九
タ 申八〇五
レ 箴八〇卅四、卅五 箴二〇四、伯十八〇十三 箴二〇四、八〇十一、十九、十六〇十
ソ 太十三〇四十四
子 箴八〇十八 提前四〇八
ナ 太十一〇廿九、卅
ラ 創二〇九 三〇十二
ム 箴八〇廿七 耶十〇十二、百六〇五
ウ 創一〇十五 五十一〇十五
ノ 申廿三〇廿八 伯廿六〇廿八
オ 詩廿七〇廿四、九十一〇十一、十二 箴十〇九
ク 利廿六〇六 詩三〇五、四
ヤ 詩九十一〇五、百十二〇七

第三章

一　我が子よわが法を忘るゝなかれ、汝の心にわが誡命をまもれ　二　さらば此事い汝の日をながくし生命の年を延べ平康をなんぢに加ふべし　三　仁慈と眞實とを汝より離すことなかれ、之を汝の項にむすび、これを汝の心の碑に彫るせ　四　さらばなんぢ神と人との前に恩寵と好名とを得べし　五　汝てゝろを盡してヱホバに倚賴め、おのれの聰明に倚ることなかれ　六　汝すべての途にてヱホバをみとめよ、さらばなんぢの途を直ちたまふべし　七　自から看て聰明とする勿れヱホバを畏れて惡を離れよ　八　これ汝の身に良藥となり汝の骨に滋潤とならん　九　汝の貨財と汝がすべての產物の初生をもてヱホバをあゞめよ　十　さらば汝の倉庫いみちて餘り、汝の酒醡い新き酒にて溢れん○　十一　我子よおんぢヱホバの懲治をかろんずる勿れ、ろの譴責を受るを厭ふと勿れ　十二　ろれヱホバいろの愛する者をいましめたまふ、あたかも父のろの愛する子を譴むるゞ如し　十三　智慧を求め得る人および聰明をうる人い福なり　十四　ろと智慧を獲るい銀を獲るに愈り、ろの利い精金よりも善けれゞゐり　十五　智慧い眞珠よりも貴し、汝の凡ての財寶も之と比ぶるに足らず　十六　其右の手に長壽あり、ろの左の手にい富と尊貴とあり　十七　ろの途い樂き途ゐり、ろの徑すべい悪く平康し　十八　これい執る者にとは生命の樹なり、之を持ものい福なり　十九　ヱホバ智慧をもて地をさだめ、聰明をもて天を置たまへり　二十　ろの知識によりて海洋いわきいで、雲い露をろゝぐなり　二一　我が子よこれらを汝の眼より離す勿れ、聰明と謹慎とを守れ　二二　然ゞこれい汝の靈魂の生命とゐり、汝の項の飾とゐらん　二三　かくて汝やすらかに汝の途をゆかん、又おんぢの足つまづかじ　二四　なんぢ臥るとき怖るゝところゐらず、臥るときは酣く睡らん　二五　なんぢ猝然なる恐懼をおろれず惡者の滅亡きたる時も之を怖るまじ　二六　ろいヱホバい汝の倚賴むものにして汝